

セルバンテスが描くジプシー ——盗人になるために生まれてきた?——

斎藤文子

はじめに

セルバンテスの『模範小説集』(*Novelas ejemplares*, 1613)の最初におかれた「ジプシー娘」(*La gitanilla*)は、収録された12編の冒頭を飾るにふさわしくジプシーの娘たちが祭日のマドリードの街中で歌い、踊り、見物客から喝采を浴びるという祝祭的なエピソードから始まる。その後、美しいジプシー娘に恋をする貴族の青年が登場、試練が与えられ、やがてめでたく結婚というお決まりの結末を迎える。タイトルとなった主人公は、セルバンテスが創作した数多くの女性たちのなかでもっともよく描かれていると評価する研究者もいる¹⁾。

またこの中編小説は、スペイン文学でジプシーを主人公にした初めての作品だということでも知られる。セルバンテスを愛読していた19世紀フランスのプロスペール・メリメは、この小説にインスピレーションを得て小説『カルメン』(1845)を書き、メリメの作品をもとにジョルジュ・ビゼーがオペラを作り、さらにそこからいくつかの映画も生まれた。セルバンテスの中編小説は、ジャンルを越えて連綿とつづくジプシー娘の物語の系譜の最初に位置するのである。

最近のセルバンテス研究では、この愛と試練の物語のなかに、社会の不平等、階級間の対立と緊張、文化的軋轢に対する作者のアイロニーを読み取ろうとすることが多い²⁾。主流社会の周縁にいるジプシーを扱っているという観点から「ジプシー娘」を分析するのである。しかしテキストのなかでジプシーたちが具体的にどう描かれているかを詳細に検討した研究は意外と少なく、またこのマイノリティー集団に対する当時のスペイン社会の支配的言説やセルバンテスの他の作品での取り上げられ方も視野に入れた論考となるとその数は限られる³⁾。これらのことを踏まえ、本稿ではセルバンテスの作品におけるジプシーの扱われ方を「ジプシー娘」を中心に検討し、この作家がいつ頃からジプシーたちに関心をもち、どのような眼差しを向けていたのかを再考したい。

スペインにおける周縁集団ジプシー

周縁集団であった移動生活者のジプシーは、それまで文学において大きく取り上げられたことはなく、演劇で脇役として登場するか、ピカレスク小説のなかでエピソードのひとつとして姿を現す程度であった⁴⁾。才気煥発な美しいジプシーを文学作品の主人公に据えたことはまったく斬新な試みであり、セルバンテスが「これに私の才知を傾けた」⁵⁾ (Cervantes 2001: 19) と自信をもって世に問うた『模範小説集』の冒頭にこの作品をおいた理由のひとつになったと考えてもよいだろう。

最初に、小説が書かれた17世紀初め、この移動生活者がスペイン社会でどのように受けとめられていたかを確認しておきたい。まずスペインのジプシーの歴史をここで簡単に振り返っておく⁶⁾。

ジプシーは1410年代にバルカン半島方面から西ヨーロッパに進出し、ドイツ、スイス、フランス、オランダ、イタリアで順次その出現が記録されるようになる。スペインではアラゴン王国のアルフォンソ5世が1425年1月12日、あるジプシー集団に対して3ヶ月間王国内を旅する許可証を出したという記録が最初のものである。この頃のジプシーたちは、放浪の目的はサンティアゴ・デ・コンポステーラなどキリスト教の聖地を訪れる巡礼であるとし、50人から100人ぐらいの集団を作って移動していた。イベリア半島に到来した自称キリスト教徒のジプシーと、キリスト教諸王国内のキリスト教徒との関係は、レコンキスタが進められていた15世紀のあいだは蜜月関係にあったとされる (Sanchez Ortega 1994: 333)。異邦の巡礼者たちに気前よく喜捨が与えられ、歓待したという記録が各地に残っている⁷⁾。また祭日に踊りや曲芸を披露し、占いを行ったという記録もあり、大道芸人として迎えられた一面もあった。

しかしスペイン王室は1492年にレコンキスタが達成されると、ジプシーへの対応を方向転換する。ジプシーの領土内の移動を禁止し、仕事を不得定住するか、領主に奉公するかを選択を迫り、それを望まない場合は60日以内の国外追放を命ずる勅令が1499年に出された。この命令に背くと、1回目は100回の鞭打ちの上、追放、2回目は耳の切り落とし及び60日間の拘束後、国外追放となった。同じ時期にユダヤ教徒が宗教的理由で国外追放されたが、ジプシーは定住しないこと、つまり主流社会に同化しないことが問題とされ、抑圧を受けることになった。

とはいえこの勅令が徹底されることはなく、続く国王たちは規定を更新した上、刑罰を重くし、17世紀に入ると抑圧はいっそうひどくなる。17世紀は、ジプシーが主流社会に入り込もうとしながらもそれができずに、困難な時期を生きた時代だった (Sanchez Ortega 1991: 71)。フェリペ3世が王位に就くと (1598-1621)、身分制議会 (コルテス) は繰り返し、社会の悪であるジプシーを排斥するよう訴えた。1603年に国王に提出された

嘆願書は、近親相姦、盗癖、放浪癖がキリスト教の掟に背くという理由で追放を要請、1607年から1610年にかけて出された一連の嘆願書は、ジプシーによる常習的な家畜泥棒のせいで貧しい農民たちが陥っている窮状を訴え、ジプシーの家畜売買を禁止し、禁令を破った者は死刑に処すべきである、もしくは定住先を指定して仕事を与え、その場所からの移動は禁じるべきだ、さもなくばこれほどの害悪をもたらすジプシーは断固国外追放しなければならないなどと敵意を募らせた。これらの嘆願書は、1609年から13年にかけて出されたモリスコ(改宗イスラーム教徒)国外追放令で高まった異教徒や異邦人排斥の熱気を反映していたとみることができるだろう。

しかし、おもに農業に従事していた30万人ものモリスコの国外追放の措置は、当然ながらスペイン社会・経済に大きな損害を与えることとなった。そのため、フェリペ3世が1611年に出した勅令では、ジプシーをモリスコと同じように追放することはせず、むしろ国内にとどまって仕事に就くこと、それも農業に従事することを求め、同化策を打ち出した。これに身分制議会は納得せず、より強力な措置を要請したので、1619年にあらたに出された勅令では、6ヶ月以内に国外に出ること、それを望まない者は人口1000人以上の町に定住すること、その際、ジプシー固有の服装や名前、言語の使用は認められず、家畜売買も禁ずるといった内容になった。それでも、組織的に徹底的に行われたモリスコの追放令に比べると緩やかだったのは、異教徒とみなされなかったことと、人口が比較的小さかったからであろう。とはいえ1619年の勅令も大きな効果はなく、身分制議会だけでなく聖職者や法律家たちも、ジプシーを排斥するよう国王に働きかけた。

ジプシーがもたらす害悪とこの移動民への非難の言説は、社会に広く共有され、ほとんど常套句と化していった。こうした敵意の背景には、スペイン国家の経済状況の悪化に伴い、定職をもたず、あるいは仕事を失い、窃盗や万引き、追いはぎ、物乞いなどで生きる都市貧民層の増大という根本的な問題があったとされる(Sanchez Ortega 1991: 78)。移動民ジプシーはこの都市貧困層と同類であるとみなされた⁸⁾。実際、ジプシーは均質的な集団ではなく、ジプシーの両親から生まれ、ジプシーの集団のなかで育った者ばかりでなく、自ら望んでジプシーに仲間入りした困窮者、犯罪者などもいたので、雑多な出自の人間の集まりだった。

1619年に刊行されたトレード大学神学教授のサンチョ・デ・モンカーダ(Sancho de Moncada)の『スペインの政治的復興』(*Restauración política de España*)は、スペインを経済的観点から立て直す方策を国王に提案する目的で書かれた書物だが、この著者はスペイン衰退の原因のひとつとして、ジプシー問題を取り上げている。ジプシーの起源を説き、歴代国王がとってきたジプシー取り締まり政策を概観した上で、これら極悪の人々は追放すべきであると強い口調で主張した。モンカーダは、ジプシーが有害である根拠を7つ列挙しているが⁹⁾、そのうち2つめに挙げているのが、盗みについてで、次のように説明している。

彼らは怠惰で放浪癖があり、諸王国に無益な人々である。商売も仕事もせず、何らかの手仕事もしない。何かをしているとすれば、それは泥棒という仕事で、ただただ諸王国の利益を巻き上げ、刈り取ることで暮らしているごろつきであり、貧しい農民の汗を糧にして生きている¹⁰⁾。(Moncada 1974: 214-215)

ジプシーの女たちは公然の娼婦で、「踊り、身振り、言葉、へたな歌」で重大な害悪をもたらし、男たちは「名の知れた泥棒」、とくに家畜が専門で、農民たちを苦しめている。また「妖術使い、占い師、魔法使い、手相占い」でもあり、人々に精神的、肉体的な大きな被害を与えているとする(Moncada 1974: 215-216)。神学教授モンカードが述べていることは、前年の1618年に出版されたピカレスク小説『従士マルコス・デ・オブregonの生涯』に登場するジプシーのネガティブな姿ともほぼ重なっており(注4を参照)、ジプシーに対する当時の一般的イメージを代弁していると言ってよいだろう。

次の節で詳しく見ていくが、セルバンテスもこうした一般社会におけるイメージを踏襲した上でジプシーを描いている。

セルバンテスの作品のなかのジプシー

さて、ジプシーの存在が社会問題となり、排斥すべきだという提言が繰り返されていた17世紀初めは、セルバンテス(1547-1616)が精力的に作品を出版していた時期でもあった。1605年に『ドン・キホーテ』前編、1613年に『模範小説集』、1614年に長編詩『パルナソ山への旅』、1615年に『いまだかつて上演されたことのない新作コメディア八編と新作幕間劇八編』(以下『コメディア八編』と略す)と『ドン・キホーテ』後編、そして1617年、死後出版となった長編小説『ペルシーレスとシヒスムダの苦難』が相次いで刊行された。

セルバンテスは、都市貧困層／流動層については、これらの作品のなかで、あるときは主人公もしくは主要人物のひとり、あるときは脇役として数多くのピカロを登場させている¹¹⁾。ピカロが主人公のピカレスク小説は、このジャンルの嚆矢となった作者不詳の『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』(1554頃)やマテオ・アレマンの『グスマン・デ・アルファラチュ』(前編1599、後編1604)がすでに知られており、セルバンテスはそれらを踏まえて、独自のピカレスク小説とピカロを生みだしていった¹²⁾。

セルバンテスのピカロへの強い関心が、同じように社会問題となっていた移動生活者ジプシーにも向けられたのは不思議ではない。「ジプシー娘」の他にもいくつかの作品でジプシーが登場する¹³⁾。

「ジプシー娘」については後述することとし、まずそれ以外の作品でジプシーがどのように出てくるかを押さえておきたい。

『ドン・キホーテ』では、1箇所、サンチョの台詞のなかでごく簡単に言及されるだけである（前編31章）。サンチョがドン・キホーテに向かって、ドゥルシネアに会いに行ったという作り話をしている場面で、これほど短時間で行って帰ってこられたのは、ロシナンテが元気よく走ってくれたからだとの嘘の説明をする。「ロシナンテはまるで耳に水銀を入れられたジプシーのロバのように走ってくれましたからね¹⁴⁾」（Cervantes 2010: 314）。家畜売買をしていたジプシーは、弱った家畜を売るときに、しばしば耳のなかに水銀を入れていた。こうするとロバや馬は一時的に元気になるので、買い手を騙すことができる。サンチョはジプシーの騙しの手口に言及することで、主人を騙そうとしたのである。

実際に家畜を売るジプシーは、『模範小説集』の「麗しき皿洗い娘」に登場する。主人公のひとり、アストウリアーノがロバを購入するために市場にやってくると、ひとりのジプシーがしつこくつきまとい、ロバを売りつけようとする。しかし別の者に、あの連中から家畜を買うものではない、良さそうなロバに見えても見かけ倒しで病気もちだから、と耳打ちされ（Cervantes 1997: 67-68）、アストウリアーノはジプシーではなく、耳打ちしてくれた男のロバを買うことにする。ここでも、家畜を売買するジプシーは信用できない人間だというステレオタイプをなぞっているが、この類型は、次に挙げる「犬の対話」や「ペドロ・デ・ウルデマラス」でも繰り返される。

『模範小説集』の最後に収録された「犬の対話」では、ジプシーの暮らしや習慣が行数を費やして説明されている。この小説は、人間の言葉を話す2匹の犬、シピオンとベルガンサが、それまで仕えてきた主人や出会った人たちについて語りながら、社会批判をするというもので、そのエピソードのひとつとして、間近で観察したジプシーの生活ぶりが紹介されるのである。

主人を次々と変え、さまざまな悪事を手伝いながらピカロのように生きてきたベルガンサは、あるときグラナダの郊外で野営しているジプシーたちに遭遇し、20日間ほどいっしょに暮らすことになる。ベルガンサはこう語る。「あのときジプシーと生活してわかったんだ。あいつらはさかんに悪知恵を働かせ、ごまかしをしたり嘘をついたりする。ジプシーの女も男も、おくるみから出て歩きはじめたときから、盗みを始めるんだ¹⁵⁾」（Cervantes 1997: 103）。自分たちの首領に忠誠を尽くし、男たちは表向きは鍛冶屋をやり、女たちは産婆をしている。みな足が速くて踊りがうまい。どうやって人を騙すかということについていつも考えている連中で、なにより家畜泥棒を得意とする。ある農夫にロバを売ったあと、そのロバを盗みだし変装させてから、同じ農夫に同じロバをもう一度売りつけたジプシーもいる。「結局のところ、あいつらは悪党なんだよ。大勢の賢明な裁判官たちが連中を罰してきたが、だからといって行いを改めようとはしない¹⁶⁾」（Cervantes 1997: 105）と断罪する。ベルガンサの見方は、前述したジプシーの排除を主張する為政者や知識人たちのそれと軌を一にする。

戯曲では、『コメディア八編』に収録されている幕間の寸劇 (entremés) 「ダガンソ村の村長選び」で、芸能集団としてのジプシーが登場する。村会議員たちが、4人の村長候補のうち誰を選ぶかで揉めていると、ジプシーの楽士たちが着飾ったジプシー娘2人を連れてやってきて、村会議員をからかう歌を歌ったり踊ったりし、お祭り騒ぎになる。結局、村長選びはうやむやになって翌日に持ち越されることになる (Cervantes 1998: 78-81)。

複数のジプシーが話の筋に絡んでくるのが、同じ『コメディア八編』のなかの戯曲「ペドロ・デ・ウルデマラス」である。「ジプシー娘」の主人公と同じ境遇のジプシー娘が出てきたり、ジプシーの首領によるジプシー生活の説明が「ジプシー娘」の長老の話と重なる部分があるなど、共通点が多いので、両者は同じ時期に書かれた可能性が高い¹⁷⁾。

主人公は、タイトルになっているペドロ・デ・ウルデマラスという名のピカロである。波瀾万丈の人生を送ってきた知恵者で、村長や友人たちの頼み事を次々と解決していく。ジプシーの首領マルドナドにその才能と度胸を見込まれ、自分たちの仲間に入って美しいジプシー娘ベリーカを妻にするよう持ちかけられる。マルドナドは、ジプシーの暮らしは自由気ままで、ほしいと思って手に入らないものはないと誘う。

ペドロは、マルドナドにそそのかされ、金持ちの寡婦から金を巻き上げることになる。ジプシー娘のひとりが寡婦に施しを求めると、寡婦に付きそっていた農夫が「この役立たずの連中は、いつも悪知恵を駆使し、本心を隠し、ずる賢く、抜け目なく立ち回る。教会には供物を捧げないし、王様に貢納もしない。表向きは鍛冶屋の仕事をしながら、陰で多くの悪事を働き、牧場には家畜泥棒であるジプシーから安全なロバは1匹もない¹⁸⁾」 (Cervantes 2015a: 837) とジプシーの悪口をまくしたてる。

一方ベリーカは、高貴な家の生まれであるが、ジプシーとして育てられていた。美しいことを鼻にかけ、気位が高く、貴族や王族のところに嫁ぐことを夢見ている。そこに国王が狩猟姿で現れ、ベリーカはチャンス到来とばかり、機転の利いたおしゃべりと美貌で国王の気を引く。国王夫妻の御前でジプシーたちが踊りを披露することになり、ベリーカは踊っている最中に、わざと国王のそばに倒れ込む。嫉妬にかられた王妃の命令により、ジプシー娘たちは連れ去られる。

ある騎士の告白により、ベリーカが王妃の兄の子供、つまり姪であることがわかり、王妃の嫉妬は和らぐ。ベリーカは自分の本当の身分を知り、首領のマルドナドにも、姉妹のように一緒に過ごしてきた娘にも冷たく当たるようになる。一方ペドロは、国王をもてなすために呼ばれた役者たちと知り合い、ジプシーの仲間になるのはやめ、芝居の一座に加わることを決意する。ベリーカやペドロがその後どうなるのかは曖昧なまま、劇は終わる。

ペドロ・デ・ウルデマラスは、民間伝承に起源をもつペテン師の名前で、この戯曲はその伝承を借りて書かれているが¹⁹⁾、高貴な生まれのジプシー娘ベリーカの話が絡むこ

とによって、やや混み合ったストーリーになっている。ピカロとして生きてきた男がその腕を見込まれてジプシー仲間に入るよう誘われるという展開は、ジプシーが閉ざされた集団ではなく、外に開かれていたことを示唆するが、現実世界でのジプシー集団も雑多な出自の者の集合体であったと指摘されていることは、先にみたとおりである。

「ジプシー娘」のあらすじ

さて、戯曲は、ピカロのペドロの活躍とジプシー娘ベリーカの話という2つの軸から成り立っていたが、「ジプシー娘」のほうは、ジプシーの娘の話が中心で、そこからジプシー集団やそれを取り巻く社会に光が当てられる。

プレシオーサは、ジプシーの老女によって一人前のジプシーになるよう育てられる。15歳になったとき、マドリードを訪れ、街中で踊りと歌を披露すると、踊りの巧さと美貌でたちまち評判になる。小姓の身なりの詩人に詩を渡されたり、賭博場にいる紳士たちと言葉を交わしたり、マドリード市の助役の屋敷に呼ばれたりする。助役夫人に請われて、プレシオーサは手相占いをすることになるが、助役の家には、占いの報酬として渡すべきわずかな金さえないことが露呈し、プレシオーサは助役に、清廉潔白では飢え死にってしまうから、賄賂を受け取らなければならないと助言する。

ジプシーたちはマドリード郊外の野営地で寝泊まりしているが、ある朝、一行が町に向かっているとき、立派な身なりの若者ファンが現れ、プレシオーサへの思いを告白し、結婚を申し込む。娘は、若者が家を出て自分たちジプシーの仲間になり、2年間ジプシー生活をするという試練を課し、2年後に互いに夫婦になってもよいと思えるなら妻になってもよいと答える。若者はその提案を受け入れる。

若者の本名はドン・ファン・デ・カルカモであるが、アンドレス・カバリエーロに名前を変えて、ジプシーと行動をともにすることになる。ジプシー集団に入るための加入儀礼が執り行われ、長老からジプシーの暮らしや掟について説明を受ける。アンドレスは、新入りジプシーとして盗みの修行を積まなければならなかったが、泥棒することに良心の呵責があり、お金で買い取ったものを盗品と称して仲間に渡してやり過ごす。あるとき山中の野営地に、以前プレシオーサに詩を渡していた小姓が現れる。彼はじつは貴族で、人を殺したので、イタリアに逃亡するためにこの地までやってきたという。ジプシーたちは小姓をかくまうことにする。

移動生活をつづける一行はムルシアの近くの村に滞在する。ジプシーたちはある宿に泊まるが、その宿の娘ラ・カルドゥチャがアンドレスにひと目惚れしてしまう。娘は若者を誘惑するがうまくいかなかったので、腹いせに、高価な装身具を故意にアンドレスの荷物のなかに隠して、泥棒に仕立ててしまう。騒ぎのなかで、その場に居合わせた兵士がアンドレスを侮辱し、平手打ちを喰らわすという事態になる。アンドレスは自分が

騎士であったことを思い出し、兵士に襲いかかると、相手の剣を抜いて殺害してしまう。アンドレスは、地下牢に入れられる。

ジプシーの一行の事件がムルシアで話題になり、国王代官（コレヒドール）の妻が、美しいジプシー娘に興味をもつ。そこで夫に頼み込んで、老女といっしょに家に連れてきてもらうことになる。すると老女は、15年前に国王代官の家から赤ん坊を盗み出したことを告白し、プレシオーサは夫婦の実の娘であると伝える。妻は赤ん坊といっしょに盗まれた宝石や身体の特徴などを確認し、老女の言うことは間違いないと確信する。プレシオーサはアンドレスを死刑にしないよう国王代官に懇願する。アンドレスが裕福な立派な家柄の息子であることが明かされると、国王代官は娘とアンドレスの結婚を認める。殺害された兵士の親族に国王代官から高額の和解金が支払われ、アンドレスに対する告訴は取り下げられる。自由の身になったファン／アンドレスとプレシオーサの結婚式が盛大に執り行われる。

以上があらすじだが、ジプシーがこの小説のなかでどのように描かれているのかをもう少し詳しく検討する。

「ジプシー娘」のなかのジプシー

先行研究でしばしば問題にされるのが、小説冒頭におかれた、語り手によるジプシーの説明である。

ジプシーは男も女も、ただ盗人になるためだけにこの世に生まれてきたようにみえる。盗人の両親から生まれ、盗人とともに育ち、盗人の修行を積み、ついにはどんな境遇にも耐えうる一人前の盗人になる。盗みへの欲求と盗む行為は分かťことのできない彼らの特性といってよく、死によってしか断ťことができないようだ²⁰⁾。
(Cervantes 1996: 31)

訳文は読みやすいように3つの文に分けたが、原文では全体が1文から成っていて、文頭に置かれた *Parece que* 「ようにみえる」「ようである」が、ジプシーの盗人としての特性を述べたこの部分全体にかかっている。ジプシーは泥棒だという社会通念を提示しながら、語り手はそれを断定していないのである。

この曖昧な提示の仕方は、のちの話の伏線になっている。引用した箇所が続いて、プレシオーサが、育ての親である老女からジプシーの振る舞いや詐欺のやり方、盗みの手口を教え込まれたと語られ、主人公が型通りの「盗人の修行」を積んでいたことを伝えるが、一方で、彼女が極めて礼儀正しく (*extremo cortés*)、たいへん誠実な (*tan honesta*) 人柄であることも述べられる。実際、この物語を通してプレシオーサが人のものを盗む

ようなことはしないので、彼女は、ジプシーのなかで一人前のジプシーになるよう育てられながら、一般にイメージされるジプシーからは外れているのである。他のジプシーたちとは違う彼女の徳性は、血筋は争えないという当時の考え方を反映しており、貴族の娘であることに起因することが物語の最後になって明かされる。またプレシオーサに恋をしてジプシーの仲間になる貴族のファン／アンドレスも、盗みを決して行わないジプシーである。ジプシー集団は、だれもが泥棒というような均質な人間たちの集まりではないことが冒頭の *Parece que* によって匂わされている。社会通念とは異なるジプシーが登場する物語だということが、最初から示唆されているのである。しかもこの小説では、ジプシーが盗みをすることが語りや登場人物の台詞のなかで繰り返し言及されるものの、盗みをする場面が直接描かれることはない。

さて小説のちょうど半ばあたりで、ジプシーの長老が、加入儀礼の済んだアンドレスにジプシーの生活について長々と語る場面がある (Cervantes 1996: 74-78)。ジプシーには独自の掟、価値基準、生活様式があることを新入りに伝受しているのだが、ここはセルバンテスがジプシー社会をどのように読者に提示しようとしているかがわかる重要な箇所である。しかし長老が言っていることには矛盾があり、研究者のあいだでも、どの部分に着目するかによって、相反する解釈がなされている。

ジプシー生活の良い点として長老が挙げるのは、「わしらの生活は、気取りや堅苦しさとは無縁だ」、「友愛の掟を不可侵のものとして遵守している」、都会で暮らす役人たちと比べて「名譽を失うことを心配してじたばたしないし、名声を高めようという野望に苦しむこともない。派閥を作ったり、嘆願書を提出するために早起きしたり、実力者に付き従ったり、特別扱いを願い出たりしない」。また自分たちは崇高な自然のなかで暮らし、「一歩足を進めるごとに目にする高く険しい岩山や雪を頂く峰、広々とした草原や緑濃い森といった自然が与えてくれるものを、フランドルの絵画や風景画のように鑑賞する」、「曙光が空の星々を追いや、掃き出して行く様子、その後仲間の暁を従えて、大気を喜ばせ、水を冷やし、大地を湿らせながら姿を現す様子を目にする」といったように、牧人小説に描かれる牧歌的な理想世界と共通する世界観を開示する。これらの部分に反応して、Américo Castro は黄金時代のテーマの要素がみられ、自然のなかでの自由な生活をうたっていると読み (Castro 1980: 177)、Casalduero は黄金時代のテーマと田舎の素朴な暮らしを結びつけて語っているとし (Casalduero 1969: 62)、Ricapito はジプシーの価値観が好意的に描かれていると説明する (Ricapito 1999: 13)。

しかし長老は同時に次のようなこともアンドレスに語る。

- ・もしプレシオーサが気に入らなければ、生娘のなかから好きな女を選ぶがよい。ただしいったん決めたら、他の女に手を出してはいけない。もっとも妻が老いたら、離縁して、新しい妻を娶ることができる。

- ・自分たちのあいだで近親相姦はよくあることだが、姦通はない。妻が不倫したら、害獣のように殺し、野山に埋めることになっている。それを怖れて女たちは貞節を守ろうとする。
- ・わしらは、野、森、山、泉、川の主だ。山は薪を、木々は果実を、ブドウ畑はブドウを、畑は野菜を、禁漁区は獲物を提供してくれる（移動生活者のジプシーは畑仕事をするわけではないので、盗みをして手に入れる、と言っているのである）²¹⁾。
- ・わしらにとって、悪天候はそよ風、雪は冷氣、雨は風呂、雷は音楽、稲妻はたいまつ、堅い土くれは羽毛布団、日に焼けた肌は堅牢な甲冑だ。
- ・野ではわしらのために家畜が育てられるし、町では巾着が切られ、金がすられる。自分たちは盗みをするので、財産の隠し場所をしっかりと考えていない者に警告してやっているのだ。
- ・要するに自分たちは才覚と能弁で生きている人種である。

長老は、ジプシーの自由な生き方、自然のなかで暮らす楽しさを理想化する一方で、女性の主体性の否定、恒常的な窃盗行為、野天で寝起きする厳しさといったジプシー社会や生活の負の部分进行挙する。Forcione は、ここで述べられている結婚相手の女性の選び方と、姦通した妻に関する掟は实际行われているというよりおそらくフィクションであろうとしつつも²²⁾、Américo Castro や Casaldueiro の肯定的な読み方を退け、セルバンテスが描くジプシー社会をまったく逆の“a demonic order of lawlessness, terror, lust, and incest”であると解釈する (Forcione 1982: 189)。これらの負の特徴の大半は、「ペドロ・デ・ウルデマラス」や「犬の対話」などセルバンテスの他の作品でも触れられている内容とはほぼ重なることを考えれば、ジプシーの長老を通して提示されるジプシー社会は、一見理想世界のように見えながらも、野蛮で非道德的な慣習をもち、決して安楽な生活ではないということになるだろう。

長老の説明を聞いたアンドレスの反応はアイロニーにみちたものだ。彼は、素晴らしい掟があることを知って自分は喜んでいる、この場で騎士の身分と名門の血筋の虚栄心を捨て去り、ジプシーの法のもとに身をおくつもりだと決意を述べる。しかしこの言葉は口先だけにすぎない。アンドレスは、結局は本来の身分と家柄を傷つけることができず、ジプシーとして暮らしていく上で必要な「盗み」には関わろうとしないのである。

アンドレスがいくら盗みをしなくても、世間から見ればジプシーの一味であることに変わりはない。小説では、ジプシーに対する偏見や差別意識も描かれる。

ムルシアの近くの村で、宿の娘ラ・カルドゥチャの悪巧みにより、アンドレスが誤って盗人にさせられる事件が起こる。アンドレスの荷物のなかに宝石が見つかること、その場に居合わせた村長は、茫然としているアンドレスとジプシーたち全員に向かって「おまえたちは誰もが知る泥棒だ、追いはぎだと、罵詈雑言を浴びせはじめる²³⁾」(Cervantes

1996: 101-102)。そこにさらに村長の甥の兵士が加わる。

見てやってくれ、盗みでくさったジプシー野郎は、なんてざまだ。こいつの両手を押さえつけたら、澄ました顔で盗みを否定するに決まっている。おまえら全員をガレー船送りにしてほしいもんだ。この悪党、村から村へと踊り歩き、宿や山中で人のものをつかばらうよりは、国王陛下にお仕えしてガレー船を漕いでいるほうがお似合いだ。兵士の面目にかけて、こいつをぶん殴って、おれさまの足元に這いつくばらせてやる²⁴⁾。(Cervantes 1996: 102)

こう言うといきなり平手打ちを喰らわす。かっとしたアンドレスは兵士から剣を奪って刺し殺し、殺人罪で鎖に繋がれることになる。やがてこの殺人犯は名家の子息だということが判明するが、プレシオーサの実の父親である国王代官はそれを知りながら、「スペインにいるジプシー全員をこんなふう鎖につないで、一日で全滅させたいものだ。暴君ネロがローマを壊滅しようとしたように、一気に²⁵⁾」(Cervantes 1996: 108)と地下牢のアンドレスに話しかける。当時の為政者のジプシーに対する敵意を反映させた言葉だと言えよう。

一方で、ジプシーが一般社会と共生する様子も小説のなかに書き込まれている。祭日の街中で踊りや歌を披露して見物客から投げ銭を受け取り、ときに請われて屋敷のなかに入り、踊ったり、手相占いをする。また拠点地を移動するなかで、村や町の近くで野営をしたり、宿に泊まるときは、その村や町で窃盗などの事件を起こさない保証として、村長に銀製品などを預け、立ち去るときはその担保を引き上げるという慣習があったことも述べられる²⁶⁾。

村祭りなどの催しで、賞金付きの徒競走や高飛び、棒投げの競技が行われると、ジプシーも参加し、何においても並外れた才能を示すアンドレスは、どこでも大活躍をして祭りを盛り上げ、人気を博す。美しいプレシオーサの評判も高く、「守護聖人の祭りや特別な祝い事を盛り上げるために彼らに声を掛けない町や村や集落はなかった²⁷⁾」(Cervantes 1996: 84)。泥棒、追いはぎ集団として一方的に排除されるのではなく、一般社会に同化している様子も描かれているのだ。

幕間劇「ダガンソ村の村長選び」では、ジプシーの一行が、踊りと歌で、集まった村会議員たちに気晴らしを提供し、「ペドロ・デ・ウルデマラス」では、国王夫妻をもてなすためにジプシーの楽士や踊り子たちに声が掛かったことは、先に見たとおりである。

ジプシー集団は、スペイン衰退の原因のひとつとして為政者や献策家たちから忌み嫌われ、国外追放すべきだという嘆願書が繰り返し提出されていたが、セルバンテスが作品に登場させるジプシーたちは、野蛮な慣習をもち、悪事を働く厄介者として差別を受けながら、非ジプシー社会にそれなりに受け入れられているのである。

ジプシーと対置される役人や貴族たち

セルバンテスは、こうしたジプシーと対置させる形で、特権身分層の側の不正や墮落、偽善を描く。

小説冒頭で、ジプシーはただ盗人になるためだけに生まれたようだと説明があったあと、場面はマドリードに移り、街中で踊りを披露したジプシーの娘たちが、市の助役に呼ばれてその屋敷を訪れるという運びになる。屋敷には助役夫人のほかには侍女や従士、隣家の夫人たちが集まっている。プレシオーサは助役夫人の手相見をすることになるが、その場にいる誰ひとり、占いの対価として渡すべき銀貨を持ち合わせていないことが露呈する。しばらくすると助役が戻ってきて、ジプシーたちに心付けを渡そうとするが、この助役のポケットもまた空っぽであった。プレシオーサは、真面目に仕事をするだけでは飢え死にしてしまうから、お役人の慣習に従って、賄賂を受け取りなさいと助言する²⁸⁾ (Cervantes 1996: 53)。悪事に手を染めなければ、役所勤めの給料では暮らしていけないというわけだ。ジプシー娘の口を借りて、役所で横行している賄賂の慣行が皮肉られているといえよう。

またジプシーの老女がプレシオーサにお金の重要性を説明する場面では、逮捕された家族や親戚を助け出すのに、裁判官と書記官に渡す金貨ほど役に立つものはない、自分たちは危うい橋を渡って暮らしているのだから、身を守るために金貨が何より必要だと説く (Cervantes 1996: 61)。裁判官も弁護士も、賄賂さえ渡せば、なんとかしてくれるのである。

罪を犯した貴族をかくまう教会や修道院の偽善も見逃されない。プレシオーサに自作の詩を渡した自称小姓の貴族の若者は、親族の若者とともに、ある身分の高い2人の紳士と剣で争うはめになり、その結果相手を殺してしまうという事件を引き起こす。2人は最初教会に逃げ込み、そのあと修道院に身を隠す。その後、ひとりには修道服に身を包み、もうひとりにはジプシーに紛れて国内を移動し、海外に逃亡しようとする。犯罪者を擁するジプシー集団はともかく、教会や修道院が特権階級の犯罪を隠し、保護さえするのである。

殺人の罪が金で解決され、裁判がまともに機能していないことをもっともよく示すエピソードは、アンドレスが起こした事件の顛末であろう。

アンドレスは自分を侮辱し殴った兵士を刺し殺し、その場で逮捕される。当然死刑の判決がでるはずだった。しかし国王代官は、アンドレスがジプシーではなく、有名騎士団の名門の騎士の息子で、自分の娘と結婚したがっていると知ると、権力と財力を駆使して事件をもみ消してしまう。亡くなった兵士の叔父である村長は、

報復の道が閉ざされたことを悟った。なぜなら国王代官の娘婿を裁くために、厳正な裁判が行われるはずなどなかったからである。[……] 殺された男の叔父は告訴を取り下げ、フアンを赦すという条件で 2000 ドゥカードの和解金を受け取った²⁹⁾ (Cervantes 1996: 111–112)。

中央から派遣される国王代官 (corregidor) の権限は一介の村長 (alcalde) よりもはるかに大きく、裁判は特権身分の者の意向次第で、公正には行われず、被害者側は和解金の前に黙るしかなかった。司法の恣意性は明らかである。しかも自分の名誉を守るために衝動的に殺人を犯したフアン／アンドレス本人は、自分の罪を後悔するそぶりさえ見せない。

「ジプシー娘」では、盗みや詐欺で生きる下層民ジプシーと、権力や財力を頼みに不正を行う特権身分層が対置されることで、ジプシーのモラルの低さが相対化されているといえるのではないか。盗人で詐欺師のジプシーと、そうではない非ジプシーという明確な二項対立がここでは成り立っていないのだ。

ジプシー老女の役割

以上見てきたように、この小説では、ジプシーに対する同時代の公的見解とは必ずしも一致しないジプシー像が提示されるが、個性をもった者として描かれるジプシーの登場人物の数はごく限られている。長々と話をする長老は、ジプシーの暮らしについて一般的な、しかも矛盾した説明をするだけの役割しか与えられていないので、主人公のプレシオーサと一時的にジプシーになったフアン／アンドレスを除けば、はっきりと人物造型されているのは、プレシオーサの育ての親である老女 (vieja. 祖母 abuela と言及されることもある) のみである。彼女には名前が付けられていないが、物語の最初から最後まで姿を現してプレシオーサを支え、Jesús Maestro の言葉を借りれば、この物語のキーパーソン (un personaje clave) になっている (Maestro 2007: 48)。

彼女は赤ん坊のプレシオーサを有力貴族の家から盗みだした張本人で、その赤ん坊を一人前のジプシーに育て上げ (踊りや歌だけでなく、詐欺のやり方、盗みの手口のすべて、さらに読み書きも教え込んだ)、長じると、今度は逆に、若くて美しく愛嬌のある娘が誘拐されることを恐れ、どこに行くにも付き添っている。ときに娘が自分が教えた以上の知恵を持ち、機転を働かせ、気の利いた会話ができることに驚く。娘の幸せを願い、娘と娘の恋人を救うために、誘拐の罪で処罰されることを覚悟の上で両親に真実を伝え、娘の結婚が決まると、婚約式の日までそばを離れない。プレシオーサに実の孫娘に対するような愛情を注いでいるのだ。

その一方で、金銭に執着する貪欲さや、ベテン師としての抜け目なさも書き込まれる。

成長したプレシオーサが歌や踊りを得意とすると知るや、「自分の懷を肥やすのに好都合な資質と魅力³⁰⁾」(Cervantes 1996: 33)を備えていると考え、彼女に歌わせるための詩を書いてくれる詩人を探す。ジプシー娘たちが踊るときは見物客の投げ銭をかき集め、屋敷に呼ばれたときは心付けを受け取るのが老女の役目である。

受け取った心付けは、屋敷を訪れたジプシーのあいだで公平に分けられることになっているが、老女は別格である。最年長である上に、ジプシー娘たちを引率し、監視し、保護する役目を担っているので、分け前の他に、稼いだお金の半分は老女のものになった。

金銭に執着する理由は自ら説明する。ファンがプレシオーサを待ち伏せして愛を告白し、その気持ちを保証するものとしてエスクード金貨 100 枚を渡そうとしたとき、プレシオーサはお金と引き換えに自分の純潔や気持ちを売ることはできないと受け取りを拒否するが、老女は、

お黙り。この旦那が恋をしていることを示す最大の証しが、御紋入りの金貨をくださったことなんだよ。ものを渡すという行為は、どんなときでも、寛大な御心の表れなんだ。[……]それにジプシー女が欲張りで締め屋だという、何百年ものあいだ続いてきた評判があたしのせいで失われてほしくないのさ。あんたは 100 エスクードの正真正銘の金貨を捨てろと言うのかい、プレシオーサ³¹⁾。(Cervantes 1996: 60)

こう言って、自分たちの強欲さを認めた上で、裁判官や秘書官に渡す賄賂が必要なのだと過去の体験を引き合いにだしながら、説明する。「あたしは三つの違う罪で三回、あやうくロバに乗せられて鞭打たれる引き回しの刑に処されるところだった。ところが一回めは銀の水差しが、次は真珠の首飾り、三回めはクアルト銅貨と交換した 8 レアル銀貨 40 枚があたしを助けてくれたのさ³²⁾」(Cervantes 1996: 61)。おそらくは盗品であろう銀製品や装飾品、もしくは金銭をお上に渡すことで刑罰を免れたという。貪欲なのは何より身を守るためなのだ。

一方で、彼女には人を愚弄して面白がるという面もある。かつてセビーリャで、ある帽子職人にでたらめな話をして、からかったことがあった。職人の家の地下に宝物が埋まっている、水を貯めた水がめのなかに身を隠し、真夜中になったらそこから出て地面を掘ると宝物が見つかる、と吹き込んだのである。お人好しの職人はその話を鵜呑みにし実行するが、水がめから出ようとしたときに、かめを倒してしまい、溺れそうになって大騒ぎをして、家の者に見つかってしまう。その後、みなが止めるのも聞かずに地面を人の背丈まで掘り進めた。この事件はセビーリャ中に知れ渡り、そのせいでセビーリャに足を踏み入ることができないというのである (Cervantes 1996: 92-93)。

家の地下に隠された宝を掘り起こすという話は、民話や小話によく出てくるモチーフであるが、このエピソードは老女のペテン師ぶりを表すために挿入されたものであろう³³⁾。

人を騙し愚弄するというジプシーのイメージを、個人の話に落とし込んで提示したということもできる。またエピソードは物語の流れのなかにも位置づけられており、老女の話聞いて、ジプシーたちは、次の移動先としてセビーリャに行くのをやめ、ムルシア方面に向かい、そこで大団円を迎えるきっかけとなる事件に遭うことになる。

老女は、最初に述べたように、育てた娘への愛情が深く、窮地に陥った彼女をなんとか救おうとする。プレシオーサが国王代官にアンドレスを救ってほしいと泣いて頼み込むのを見ると、こう切り出すのだ。「旦那さま方、しばらくお待ちいただけますか。みなさんの涙を笑いに变えてみせますから。たとえあたしの命と引き換えになっても³⁴⁾」(Cervantes 1996: 104)。プレシオーサが赤ん坊のときに身につけていた宝石を証拠品として持ってきて、「もし今からみなさまにお伝えしようとする吉報が、あたしの重い罪を許してもらえるとこのご褒美をいただける価値がなければ、あたしはここであなた方が下す罰を謹んでお受けするつもりです³⁵⁾」(Cervantes 1996: 105)と前置きしながら、15年前の誘拐を告白する。またアンドレスについても、本当の身分を明かし、これまでの経緯を説明する。国王代官夫人はいなくなった子供が戻ってきたことを知り、驚きのあまり失神するが、正気に戻ると「ジプシーというより天使のような善き人³⁶⁾」(Cervantes 1996: 105)と老女に呼びかけさえるのである。娘を実の両親に返したということで、老女は誘拐の罪を赦してもらうことになる。その後もプレシオーサのそばに付き添うことを許されたのは、ジプシーの社会的地位を考えれば、異例の待遇であろう。

この小説は、ジプシーの老女に、赤ん坊の誘拐という物語のきっかけを作り、最後にハッピーエンドをもたらすという、きわめて重要な役割を与えている。Michael Gerliはおもにプレシオーサとアンドレスについて“(c)haracters who are expected to perform in a stereotypically literary fashion act in a ways that do not conform to the stereotype” (Gerli 1986: 31)と述べているが、この名前のない老女も、プレシオーサとファン／アンドレスの物語を支える重要な脇役として、ジプシーに対する文学的ステレオタイプ、さらには社会の公的見解が示すステレオタイプには当てはまらない行動をする人物として造型されている³⁷⁾。

結論

この物語には、老女のほかに、ジプシーの典型から外れた人物が2人いる。プレシオーサとアンドレスである。プレシオーサのほうは、実際に盗みや詐欺を働くことがなく、ファンから差し出された金貨100枚を受け取ろうとしないなど、強欲さとも無縁である。品の悪い歌を歌ったり、良くない言葉遣いをするを好まず、道徳的に正しく行動する。また老女が驚くほどの知恵を知らぬ間に身につけており、相手が年上で身分の高い人間であろうと臆せず機転の利いたやりとりができる。ジプシー長老が説く男尊女卑の

慣習に対しては、自分の心は自由であり、自分の意志に従って行動するつもりだとはっきり自己主張する。

血筋によって人の素質が決まるとされていたこの時代、貴族の血筋を引いているということが、他のジプシー仲間とは異なり理想的な女性に描かれる根拠となっているのだが³⁸⁾、先に見たように、この物語では、特権身分層のあいだでも賄賂が横行し、権威と金銭の力で殺人の罪が赦されるなど、不正が当たり前に行われていることが指摘されている。ジプシーという点だけでなく貴族という点からも、プレシオーサの模範性は際立っているといえよう³⁹⁾。

一方、名門貴族であるファンは、ジプシー娘に恋をし、家を飛び出してジプシーの仲間に入る。いっしょに生活をしながら娘との愛を育むが、盗みを働くことを拒否するなど、ジプシー集団に同化することができない上に、ジプシーであることを侮辱されると、衝動的に相手を殺めてしまう。いわば、なりそこないのジプシーである。

このふたりは最後に本来の身分に戻り結婚する。Forcione は「ジプシー娘」の詳細な分析を通して、この小説は、プレシオーサとファンがジプシーという底辺社会（荒野）から帰還して理想の家庭を築く物語であり、エラスムスの理想の結婚の思想を体現していると解釈した。ジプシー長老の演説では、ジプシー生活の自由さや喜びも強調されているが、その社会は基本的には、先にも引用したように、“a demonic order of lawlessness, terror, lust, and incest” (Forcione 1982: 186) であり、“(i)ts principal function is the presentation of a demonic counterweight to the perfect marriage” (Forcione 1982: 189–190) であると、このセルバンテス研究者は捉えている。ジプシー社会は、完璧な結婚を実現するために、そこから救い出されるべき悪魔的世界として提示されていると読み解くのである。

しかし上で検討したように、ジプシー老女に着目したとき、この物語で（生まれが貴族である 2 人を除いて）ただひとり個性をもって描かれているジプシーは、“a demonic order of lawlessness, terror, lust, and incest” の一員であると単純に断定はできない。Forcione は老女についてとくに分析をしていないが、Forcione の論に沿って言うならば、老女はむしろ理想の家庭を築く手助けをするジプシーであろう。セルバンテスは、ジプシーの一人を多面的な人物として提示し、決して一方的な見方で描いてはいないのだ。

Américo Castro は、セルバンテスが社会の周縁者を好んで描くことに関して、次のような説明をする。「[セルバンテスは] 無法者、野山の自由を求める放浪者、法的・社会的繋がりから自由である者（ヤギ飼い、遍歴の騎士、ジプシー、盗賊、ガレー船の漕刑囚、追放されたモリスコ）、また世間の常識から外れた狂人までも造型した。社会から外れ、社会に適合しない人たちへの関心がセルバンテスの芸術の重要な部分を成している。[……] それまで社会のくずとか常軌を逸しているとされ、滑稽や制裁のテーマになっていたものを、説得力をもって形作って肯定し、生き生きと描くことに成功した⁴⁰⁾」(Castro 1960: 368–369)。

セルバンテスは、Castro が指摘するように、スペイン主流社会の外にいる人たちに強い関心を寄せていた。それゆえ 17 世紀初めにスペインでジプシー排斥運動が高まると、この移動生活者にも興味を持つようになったと考えてよいのではないか。1605 年の『ドン・キホーテ』前編では、サンチョの台詞のなかのごく簡単な言及でしかなかったが、1613 年に出た『模範小説集』と 1615 年の戯曲集では、複数の作品でジプシーを登場させている。その描かれ方は、本稿で見てきたとおり、主流社会で流通しているイメージや公的文書で提示される姿と重なる部分も多いが、「ジプシー娘」においては、「ただ盗人になるためだけにこの世に生まれてきたようにみえる」という曖昧な言い方から書き始めて、ジプシーのステレオタイプに一石を投じようとしたように思える。しかも名前を与えられていないひとりのジプシー老女に焦点を当て、より多層的で人間的な人物として描くことで、社会の底辺で生きるジプシー全体にも光を投射しようとした。Lerner が「それまで文学の題材としてこれほどまで大きく取り上げられたことがなかった現実を批判的に問うことで、両義的な連帯感が発生している⁴¹⁾」(Lerner 1980: 57) と述べるように、セルバンテスはジプシーという新しい文学対象を見出し、社会や文学におけるこの集団への一面的な捉え方を疑問に付したのである。

注

- 1) たとえば、“el personaje de Preciosa se nos aparece como la más cautivadora y lograda de sus creaciones femeninas” (Avalle-Arce 1982: 21)、“Cervantes’s most memorable female character” (Forcione 1982: 96) など。
- 2) 代表的なものは *A Companion to Cervantes’s Novelas ejemplares* に収められた Clamurro の論考。“the author has taken us on a journey of subtle yet penetrating and disturbing glimpses into the often harsh inequalities and social tensions of the age” (Clamurro 2005: 82)。
- 3) 「ジプシー娘」におけるジプシーの描かれ方を考察した主要な論考には、Lerner、Laffranque、Navarro Hernández のものがある。当時の社会における支配的言説のなかにこの小説においてジプシーを論じたものには、Ricapito など。Ricapito は支配的言説を否定するジプシー像を描いたと分析しており、本稿の立場とは異なる。
- 4) 演劇では、スペインの演劇界に大きな影響を与えたポルトガルの Gil Vicente (1465–1536?) が 1521 年、登場人物がジプシーのみという一幕劇「ジプシー女たちの小劇」*Auto de las gitanas* を書き、ポルトガル国王フアン 3 世の御前で上演した。最初にジプシー女性 4 人が観客に向かって、シャツやスカートを恵んでほしいと語りかけ、次にジプシー男性 4 人が馬やロバを買ってくれと要求し、そのあと歌と踊りがあって、ジプシー女性が観客の女性たちの手相を見て未来を占うという取りたてて筋のないシンプルな小劇である。物乞い、家畜売買、手相占いなど、当時の社会におけるジプシーの一般的イメージを再現しており、後の文学作品で繰り返されるジプシーのステレオタイプの原型がこの小劇で作られたと言われている。16 世紀半ばまで、Lope de Rueda や Juan de Timoneda などの劇作品にジプシーが脇役でしばしば登場する。ピカレスク小説では、1604 年に出版された Mateo Alemán の『グスマン・デ・アルファラチェ』後編第 3 巻 8 章で、ガレー船に乗っている漕刑囚のなかにジプシーがいることが言及される (Alemán 1984: 460)。1618 年の Vicente Espinel『従者マルコス・デ・オブレゴンの生涯』では、第 1 部 16 章と 20 章に姿を現す (Espinel 1980: 247–251,

276–280)。16 章では、主人公マルコスが盗まれた自分のロバを売っているジプシーたちに出会い、知恵を働かせてロバを取り戻し、20 章では、川の近くで休んでいるジプシー集団に遭遇、物乞いをされた上、ロバも奪われそうになり、怖くなって嘘を言って逃げ出す。どちらのエピソードでも、盗人、物乞い、犯罪者というジプシーのネガティブな側面が強調されている。Avalle-Arce によれば、16 世紀前半までの戯曲に登場するジプシーは比較的好意的に描かれていたが、ジプシーへの抑圧が強まった 17 世紀になって書かれたピカレスク小説のジプシーは、一様に敵意をもって扱われた (Avalle-Arce 1982: 20)。

- 5) “A esto se aplicó mi ingenio [...]”
- 6) ジプシーの歴史については、おもに Sanchez Ortega、水谷、フレーザーを参照した。
- 7) 竹沢は、人種研究の観点から中世におけるスペインのユダヤ人、ルーマニアのジプシー、西日本の河原者を比較する論考のなかで、ヨーロッパではジプシーをけがれ視する一方、「言わば「まれびと」扱いし喜捨を与えた」事例が、ジプシーとの遭遇の初期において確認されていると指摘している (竹沢 2020: 8)。
- 8) 水谷によれば、ジプシー研究は 1970 年頃にパラダイムの転換があった。ヨーロッパの社会史研究の進展により、中世から近世への移行期である 15 世紀から 16 世紀にかけてのヨーロッパ社会では、崩壊しつつある旧体制から放出された膨大な数の流民層 / 貧民層が重大な社会問題になっていたことが明らかにされ、ジプシーもこうした社会層の一部を構成していたという点から研究が進められることになった (水谷 2018: 27–28)。
- 9) モンカードの挙げる 7 つの根拠は、(1) 敵地に簡単に入り込み、複数言語を操る彼らは、スパイ、王室への裏切り者である。(2) 怠惰で放浪癖があり、仕事をせず、無益な人々である。(3) ジプシーの女は娼婦である。(4) 言わずと知れた泥棒である。(5) 妖術使い、でたらめな占い師である。(6) 異教徒である。(7) 自分たちのあいだでしか通じない言葉で意思疎通をする (Moncada 1974: 214–218)。
- 10) “son gente ociosa, vagabunda, y inútil a los Reinos, sin comercio, ocupación ni oficio alguno; y si alguno tienen, es hacer ganzúas y garavatos para su profesión, siendo zánganos, que sólo viven de chupar y talar los reinos, sustentándose del sudor de los míseros labradores [...]” 以下、本稿の日本語訳はすべて執筆者による。
- 11) ここですべてをあげることはしないが、いくつかを挙げると、『ドン・キホーテ』前編 22 章に登場する、ガレー船の漕刑囚として連行されるヒネス・デ・パサモンテ、『模範小説集』収録「リンコネーテとコルタディーリヨ」の主人公 2 人とモニポディオの一味、「嫉妬深いエストレマドゥーラの男」のロアイサ、「麗しき皿洗い娘」のカリアーソ (由緒ある家柄の青年だがピカロになる)、「犬の対話」に登場するピカロのように生きる犬ベルガンサなど。散文作品だけでなく、戯曲でも、あとで紹介する「ペドロ・デ・ウルデマラス」の主人公をはじめ、ピカロが多数登場する。
- 12) Avalle-Arce の言葉を借りると、「リンコネーテとコルタディーリヨ」は『ラサリーリヨ・デ・トルメスの生涯』から始まるピカレスク小説の伝統からは外れたピカレスク小説 (Avalle-Arce 1982: 32–37)、「犬の対話」は実験的ピカレスク小説 (Avalle-Arce 1987: 26–30)。
- 13) 同時代の売れっ子劇作家で、作った戯曲数が生涯で少なくとも 300 以上と言われている Lope de Vega の戯曲のなかでジプシーが登場するのは、Avalle-Arce によれば 4 作品、それもマイナーな役割しか与えられていない (Avalle-Arce 1982: 21)。Lope と比べれば、セルバンテスのジプシーへの関心は高いと言ってよいだろう。
- 14) “andaba Rocinante como si fuera asno de gitano con azogue en los oídos.”
- 15) “La que tuve con los gitanos fue considerar en aquel tiempo sus muchas malicias, sus embaimientos y embustes, los hurtos en que se ejercitan, así gitanas como gitanos, desde el punto casi que salen de

las mantillas y saben andar.”

- 16) “Finalmente, ella es mala gente, y, aunque muchos y muy prudentes jueces han salido contra ellos, no por eso se enmiendan.”
- 17) 「ペドロ・デ・ウルデマラス」の制作年代についてはいくつか提案されているが、2015年にReal Academia Españolaが出した版では1610–13年頃としている（Cervantes 2015b: 146）。「ジプシー娘」は、ここでは詳しく触れないが、1613年刊行の『模範小説集』の12編の制作時期について相反する諸説があるため、確定はされていない。García Lópezの最新の研究では、いくつもの文学ジャンルを組み合わせる実験的な試みをしている「ジプシー娘」「犬の対話」「麗しき皿洗い娘」の制作時期は遅かった可能性が高いという結論を出している（García López 2015: 215–216）。つまり刊行年の1613年に近い時期だったと推定している。
- 18) “Y esta gente infrutuosa, siempre atenta a mil malicias, doblada, astuta y mañosa, ni a la Iglesia da primicias ni al rey no le sube en cosa. A la sombra de herreros usan muchos desafueros, y, con perdón sea mentado, no hay seguro asno en el prado de los gitanos cuatreros.”
- 19) 民間伝承や文学作品に登場するペドロ・デ・ウルデマラスの系譜は、Cervantes 1986: 253–255に簡潔にまとめられている。
- 20) “Parece que los gitanos y gitanas solamente nacieron en el mundo para ser ladrones: nacen de padres ladrones, críanse con ladrones, estudian para ladrones y, finalmente, salen con ser ladrones corrientes y molientes a todo ruedo; y la gana del hurtar y el hurtar son en ellos como accidentes inseparables, que no se quitan sino con la muerte.”
- 21) 「ペドロ・デ・ウルデマラス」のジプシー首領マルドナドは「どんなに厳重に警備されている菜園でも、美しく実ったすべての果実の初物をおれたちに提供してくれる。白ブドウでもマスカットでも実を結んだら、大胆なジプシーの手に入らないものはまずない」（Cervantes 2015a: 817）とペドロに説明しており、その内容はここでジプシー長老が言っていることとほぼ重なる。
- 22) Forcione は、この小説で説明されるジプシーの結婚のしきたりについて、セルバンテスがイスラーム世界で実際に見聞したことや、古代、東洋、新大陸についての同時代の書物を読んで仕入れた情報に基づいて創作された可能性が高いとする。ファンがジプシー集団に加わるときに、乗ってきたラバをその装備とともに地面に埋めるというエピソードに関しては、セルバンテスと同時代に書かれた南アメリカの探検報告書に記録された先住民の慣習をおそらくモデルにしていると指摘する Jorge Campos (Campos 1947: 394–395) の研究を紹介している（Forcione 1982: 189）。
- 23) “comenzó a decir mil injurias a Andrés y a todos los gitanos, llamándolos de públicos ladrones y salteadores de caminos.”
- 24) “¿No veis cuál se ha quedado el gitanico podrido de hurtar? Apostaré yo que hace melindres y que niega el hurto, con habérsele cogido en las manos; que bien haya quien no os echa en galeras a todos. ¡Mirad si estuviera mejor este bellaco en ellas, sirviendo a su Majestad, que no andarse bailando de lugar en lugar y hurtando de venta en monte! A fe de soldado, que estoy por darle una bofetada que le derribe a mis pies.”
- 25) “¡Que así tuviera yo atraillados cuantos gitanos hay en España, para acabar con ellos en un día, como Nerón quisiera con Roma, sin dar más de un golpe!”
- 26) トレード近郊の村とムルシア近郊の村で、それぞれの村長に担保の銀製品を預けたことが言及されている（Cervantes 1996: 82, 99）。
- 27) “no había villa, lugar ni aldea donde no los llamasen para regocijar las fiestas votivas suyas, o para otros particulares regocijos.”

- 28) “Coeche vuesa merced, señor tiniente; coeche y tendrá dineros, y no haga usos nuevos, que morirá de hambre.”
- 29) “vio tomados los caminos de su venganza, pues no había de tener lugar el rigor de la justicia para ejecutarla en el yerno del corregidor. [...] Recibió el tío del muerto la promesa de dos mil ducados, que le hicieron porque bajase de la querella y perdonase a don Juan [...].”
- 30) “habían de ser felicísimos atractivos e incentivos para acrecentar su caudal [...].”
- 31) “Calla, niña, que la mejor señal que este señor ha dado de estar rendido es haber entregado las armas en señal de rendimiento; y el dar, en cualquiera ocasión que sea, siempre fue indicio de generoso pecho. [...] Y más, que no quiero yo que por mí pierdan las gitanas el nombre que por luengos siglos tienen adquerido de codiciosas y aprovechadas. ¿Cien escudos quieres tú que deseche, Preciosa, y de oro en oro [...]?”
- 32) “Tres veces por tres delitos diferentes me he visto casi puesta en el asno para ser azotada, y de la una me libró un jarro de plata, y de la otra una sarta de perlas, y de la otra cuarenta reales de a ocho que había trocado por cuartos [...].” 見せしめのための引き回しの刑は、売春斡旋や魔女に科せられた刑だった。
- 33) Jorge García López はこのエピソードにはイタリアの小話のような後味の悪さがあると注釈している (Cervantes 2001: 87, Nota 352)。
- 34) “Espérenme vuestras mercedes, señores míos, un poco, que yo haré que estos llantos se conviertan en risa, aunque a mí me cueste la vida.”
- 35) “Si las buenas nuevas que os quiero dar, señores, no merecieren alcanzar en albricias el perdón de un gran pecado mío, aquí estoy para recibir el castigo que quisiéredes darme [...].”
- 36) “Mujer buena, antes ángel que gitana [...].”
- 37) Navarro Hernández は、老女について、社会の周縁で生きるずるがしこい強欲な人物で、娘たちを働かせて金を得ているため、セレスティーナ的人物だと解釈している (Navarro Hernández 2015: 182)。しかし、ジプシー老女は、セレスティーナよりも愛情深い人間に描かれているのは明らかである。García López は、「犬の対話」のなかで魔女扱いされているカニサーレスは実際には魔女などではなく、惨めな孤独な老女がドラッグを使って幻想を見ているにすぎないと分析し、魔女と呼ばれている人物を歴史的、社会的に位置づけて描くことがセルバンテスのめざす「模範性」だったと主張している (García López 2015: 222-23)。García López にらえば、この小説では、ジプシーに対する当時の偏見を排して、老女の姿を「模範的に」描いたと言えるだろう。
- 38) 本稿では詳しく述べないが、セルバンテスの「ジプシー娘」は古典古代後期に遡るロマンスと呼ばれる文学ジャンルに分類されている。ロマンスの特徴について論じているノースロップ・フライによれば、彼が名付けるところの感傷ロマンスにおいて、美と徳の高さは自動的に貴族階級と結びついていた。「感傷ロマンスは[……]「血筋は争えない」式の慣習を採用していて、道徳的美点と社会階級との繋がりが「ノーブル」(高潔な、身分の高い)という言葉に暗に示されている。英雄(=主人公)は卑しい身分の出であるように見えるかもしれないが、彼が本物のヒーローならば、物語の最後で上流階級の間人であることが明らかになる公算は大きいだろう」(フライ 1999: 181)。
- 39) Laffranque は、「ジプシー娘」が2つの異質な世界を近づけ、つなぐ作品だと解釈し、プレシオーサはそれを象徴する人物だとする。“Preciosa representa sin embargo un personaje intermedio. Símbolo de una posible aproximación, *la Gitanilla* es además un lazo real entre dos mundos heterogéneos” (Laffranque 1977: 559)。
- 40) “labró figuras de «forajidos» (*foraexití*), de vagantes por la libertad de los campos, de los sueltos y

desligados de enlaces jurídicos y sociales (cabreros, caballeros andantes, gitanos, bandidos, galeotes, moriscos desterrados), o incluso de locos en discordancia con el sentir común de las gentes. La preferencia por la humana fauna de los alejados e incongruentes alimentó la región más valiosa del arte cervantino; el genio poético consiguió hacer real, como afirmación convincente y estructurada, lo que hasta entonces sólo valía como detritus y extravagancia, y como tema para lo cómico o la ceñuda sanción.”

- 41) “una ambigua solidaridad emana de este preguntarse críticamente por una realidad que no había sido objeto de tratamiento literario previo de esta magnitud [...]”.

参考文献

- Alemán, Mateo. 1984. *Guzmán de Alfarache II*, Benito Brancaforte (ed.). (Madrid: Cátedra).
- Avalle-Arce, Juan Bautista. 1982. “Introducción” en Cervantes, *Novelas ejemplares I*. (Madrid: Castalia), pp. 9–37.
- . 1987. “Introducción” en Cervantes, *Novelas ejemplares III* (Madrid: Castalia), pp. 7–33.
- Campos, Jorge. 1947. “Presencia de América en la obra de Cervantes,” *Revista de Indias*, 8, pp. 371–404.
- Castro, Américo. 1980. *El pensamiento de Cervantes*, reimpresión (Barcelona: Noguer).
- . 1960. *Hacia Cervantes*, 2ª ed., revisada (Madrid: Taurus).
- Casaldueiro, Joaquín. 1969. *Sentido y forma de las “Novelas ejemplares.”* 2ª ed. (Madrid: Gredos).
- Cervantes Zaavedra, Miguel de. 1986. *El rufián dichoso, Pedro de Urdemalas*. Jenaro Talens y Nicholas Spadaccini (ed.). (Madrid: Cátedra).
- . 1996. *La gitanilla, El amante liberal*. Florencio Sevilla Arroyo y Antonio Rey Hazas (ed.). (Madrid: Alianza).
- . 1997a. *La ilustre fregona, Las dos doncellas, La señora Cornelia*. Florencio Sevilla Arroyo y Antonio Rey Hazas (ed.). (Madrid: Alianza).
- . 1997b. *El casamiento engañoso, El coloquio de los perros*. Florencio Sevilla Arroyo y Antonio Rey Hazas (ed.). (Madrid: Alianza).
- . 1998. *Entremeses*. Florencio Sevilla Arroyo y Antonio Rey Hazas (ed.). (Madrid: Alianza).
- . 2001. *Novelas ejemplares*. Jorge García López (ed.). (Barcelona: Crítica).
- . 2010. *Don Quijote de la Mancha*. Francisco Rico (ed.). (Madrid: Punto de Lectura).
- . 2015a. *Comedias y tragedias*. Luis Gómez Canseco (ed.). (Madrid: Real Academia Española).
- . 2015b. *Comedias y tragedias*. Volumen complementario. Luis Gómez Canseco (ed.). (Madrid: Real Academia Española).
- Clamurro, William H. 2005. “Enchantment and Irony: Reading *La gitanilla*,” in Stephen Boyd (ed.), *A companion to Cervantes’s Novelas ejemplares* (Woodbridge: Tamesis), pp. 69–84.
- . 1997. *Beneath the Fiction: The Contrary Worlds of Cervantes’s Novelas Ejemplares*, (N.Y.: Peter Lang).
- Espinell, Vicente. 1980. *Vida del escudero Marcos de Obregón I* (Madrid: Castalia).
- Forcione, Alban K. 1982. *Cervantes and the Humanist Vision: A Study of four Exemplary Novels*. (NJ: Princeton University Press).
- García López, Jorge. 2015. *Cervantes: la figura en el tapiz—itinerario personal y vivencia intelectual* (Barcelona: Pasado y Presente).
- Gerli, E. Michael. 1986. “Romance and Novel: Idealism and Irony in *La Gitanilla*,” *Cervantes*, 6 (1), pp. 29–38.
- Laffranque, Marie. 1977. “Encuentro y coexistencia de dos sociedades en el siglo de oro: *La gitanilla* de Miguel de Cervantes (1),” in Maxime Chevalier y otros (ed.), *Actas del Quinto Congreso de la Asociación Inter-*

- nacional de Hispanistas: celebrado en Bordeaux del 2 al 8 de septiembre de 1974* (Bordeaux: Presse Universitaire de Bordeaux), pp. 549–561. <http://www.cervantesvirtual.com/nd/ark:/59851/bmcd23x7> (accessed 2021.10.1)
- Lerner, Isaías. 1980. “Marginalidad en las novelas ejemplares. La Gitanilla,” *LEXIS*, 4 (1), pp. 47–59.
- Maestro, Jesús G. 2007. *Las ascuas del Imperio. Crítica de las Novelas ejemplares de Cervantes desde el materialismo filosófico* (Vigo: Editorial Academia del Hispanismo).
- Moncada, Sancho de. 1974. *Restauración política de España*. Jean Vilar (ed.). (Madrid: Instituto de Estudios Fiscales, Ministro de Hacienda).
- Navarro Hernández, Emilio Enrique. 2015. “Retrato de vicios y virtudes: el gitano en las *Novelas ejemplares*,” in *La Novelas ejemplares: texto y contexto (1613–2013)*, Aurelio Gonzáles y Nieves Rodríguez Valle (ed.). (México: El Colegio de México), pp. 179–191.
- Ricapito, Joseph, V. 1999. “‘La gitanilla’: At the Crossroads of History and Creativity,” in *Cervantes’s Novelas ejemplares. Between History and Creativity* (West Lafayette: Purdue University Press), pp. 11–37.
- Sánchez Ortega, M.^a Helena. 1991. “La oleada anti-gitana del siglo XVII,” *Espacio, Tiempo y Forma, Serie IV, H.^a Moderna*, t.4, pp. 71–124.
- . 1994. “Los gitanos españoles desde su salida de la India hasta los primeros conflictos en la península,” *Espacio, Tiempo y Forma, Serie IV, H.^a Moderna*, t.7, pp. 319–354.
- Vicente, Gil. 1521. “Auto de las gitanas,” <http://www.biblioteca-antologica.org/es/wp-content/uploads/2017/10/VICENTE-Auto-de-Las-Gitanas.pdf> (accessed 2021.8.14)
- セルバンテス, ミゲル・デ. 2017. 『模範小説集』 樋口正義・斎藤文子・井尻直志・鈴木正士訳, 水声社.
- 竹沢泰子. 2020. 「中世におけるユダヤ人・「ジプシー」・河原者をめぐる「特権」言説」(『部落解放研究』213), pp. 1–34.
- フライ, ノースロップ. 1999. 『世俗の聖典——ロマンスの構造』 中村健二・真野泰訳, 法政大学出版局.
- フレーザー, アンガス. 2002. 『ジプシー——民俗の歴史と文化』 水谷曉訳, 平凡社.
- 水谷曉. 2018. 『ジプシー史再考』 柘植書房新社.
- メリメ, プロスペール. 2019. 『カルメン/タマンゴ』 工藤庸子訳, 光文社古典新訳文庫.